

ブロードウェイの扉

ブロードウェイの扉

菊田一夫

中央公論社

ブロードウェイの扉

定価四三〇円

昭和四十二年七月三十日印刷
昭和四十二年八月五日発行

著者 菊田一夫

発行者 山越 豊

印刷者 山田 博

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一

振替東京三四

©一九六七検印廃止

ブ
ロ
ー
ド
ウ
ェ
イ
の
扉

友忠は桜桃さくらんぼが好きだ。趣向としては少女か子供のように恥ずかしいけれど、彼は福島県飯坂の奥にある茂庭村の生れだから何処にいても桜桃の実を食べると、故郷に帰ったようなすがすがしい気分になる。六月は桜桃の季節。

アパートに帰ってきた友忠は、眼の前の机においたハトロンの袋をあけた。なかには、すぐ近くのアイランド系のアメリカ人の八百屋から買ってきた桜桃の実が二つかみほどはいっている。「これだけしか買えないんだ……しかもこの桜桃は……」

おなじ桜桃でも日本のそれとは、ずいぶんちがう。あれが艶々とした少女の頬の色なら、これは黒ん坊の顔のような、くろずんだ葡萄の実の紫。そのはちきれそうな黒い果皮に歯をあてると、なかからは紅い毒々しい色をした甘酢っぱい果汁がびゅっとほとぼしり出て、口のまわりは食紅を塗りたくったように染められてしまう。所変れば品変る、友忠はお婆さん達の言った言葉を思い出す。しかし品は変っても、ニューヨークのこの安アパートの見すばらしい窓際で食べても、それは、やっぱりアメリカ産の六月の味。友忠は、日本から渡航してきてから、はや三年目の日本人なのである。このニューヨークという大都会に住む多くの人々から見れば彼は異邦人。

友忠は少年の頃、農林省の役人である父親が本省詰めとなって東京に出る直前まで、福島県茂

庭の小学校に通っていた。茂庭は桜桃の名産地だ。子供達は学校の一日が終ると近くの桜桃畑にもぐりこんでは熟して落ちこぼれた桜桃の実を食べた。腹がくちくになると拾った熟果をぶっつけ合ったり揉みくちやにしては遊んだ。桜桃畑の六月は彼等にとつての楽園だった。一家が東京に出てからも桜桃と縁が切れたわけではなかった。中学生の友忠は貧しい小遣錢をはたいて八百屋から古新聞の袋に包んだ桜桃を買っては食べた。銀座の千疋屋あたりの店頭で箱詰となった小さな林檎ほどもある立派な桜桃を見たことはあるが、彼の食べたのは八百屋の店頭に一山いくらと山盛りになった小粒の安物の桜桃である。それでもやっぱり……。

一九六五年六月……いま……友忠はアメリカ合衆国ニューヨーク市のウエストエンドに近い五十六丁目のアパートに住んでいる。渡航してきたのは六二年の秋だった。ブロードウェイの劇場の舞台に立つのが目的だった。東京で知合った演劇好きのアメリカ人が役者になるならブロードウェイの役者になればよ、ブロードウェイの舞台にも東洋人はしばしば登場する。本物の日本人の役者はまだ一度も登場したことがない。君は強い個性をもっているのだから調法がられて、そのうちにいい役をとることも可能だろう、と言ってくれたのが動機である。

だが渡航してきて以来三年たったいまでも、彼はまだ俳優ではない。この三年の間に彼はダンスのレッスンにも通ったし、演劇学校にも通った。歌も歌える。ある演劇学校では成績がいいので特待生として授業料免除の特典も与えられたことがある。という意味から言えば、もはやアメリカにいる日本人桐ヶ谷友忠は完全な俳優なのだが、彼はしかし、ブロードウェイの舞台にはまだ一度も出たことのないブロードウェイ出演希望の俳優なのである。

このあたりの区画、ウエスト・サイドの四十二丁目あたりから六十丁目のあたりには中級のアパートが多い。それらのアパートの部屋代はイースト・サイドにある街々の同じ級のアパートの部屋代よりはるかに格安である。つまりニューヨークという大都会を代表するマンハッタンという細長い大きな島の東寄りの側、イースト・サイドに住む人々や商社は高級で上品であるが、それに比較して西寄り側、ウエスト・サイドの商家やそこに住む人々は高級ではなく実利主義で、なかには下層階級の人々の住む街々が多くふくまれてゐる。だからいろんな概念からいっても、この側は東側よりも格が落ちる。という意味で同じ級のアパートの部屋代も格安、なのであるか。

この区画のアパートには、ブロードウェイに近くて地の利がいいからか、その劇場に出演する役者が多く住んでいる。それもやはりスター級は見栄をはらなくてはならないからイースト・サイドに住み、此処に住むのは中堅級や脇役が大部分である。部屋代は3坪……すなわち三部屋にバス、キッチン付きで二〇〇ドル。それ以上もあるしそれ以下もある。主役でない役者達が住むには手頃な値段なのであろう。といって友忠も、そのようなアパートに住んでいるというのではない。彼の住んでいるのは、そのアパート群のなかに唯一軒、昔からの取り残されたような、背の低い煉瓦建のカビの生えたアパートである。バス・ルームもトイレも共用の一部屋で週七ドル。ブロードウェイ六十三丁目のステージ・デリカテセンに通勤して皿洗いをしている彼は、毎日七階建の天井裏まで階段を歩いて登って、その階の一番隅にある自分の部屋に帰りつくのである。

あたりのアパートにはブロードウェイの役者がたくさん住んでいるから、そのうちには誰かと顔見知りになって、プロデューサーに推薦して貰えるかも知れない。と、三年前にニグロの青年やプエルトリコの青年と競争して、この部屋を獲得し住みついた。……しかし三年たっても彼はやっぱりこのあたりの人々にとっては異邦人だった。……だから……桐ヶ谷友忠のいまの幸福は、六月の風の吹く街の八百屋の店頭から、その店頭に山盛りになっている黒い桜桃を買ってきて食べて、そのものがなしい味のなかから故国をしのぶこと、それだけである。

友忠は桜桃を食べ終ると、ハトロンの袋を丸めて捨てて、由起からきた手紙への返事を書くためにペンを取りあげた。

「あなたは簡単に、私もブロードウェイにいくのだと言うけれど、ブロードウェイとはどんな街なのだから知っているのですか」

これが由起への返事の書き出しである。

開け拡げた窓の向い側には、3号で二〇〇ドルの部屋の窓々が見え、明るい電灯の光りが煌々（きらきら）と輝いている。あの部屋の役者は、今夜の芝居が終ったので、仲間を集めてパーティをやっているらしい。近代的建築のアパートだとかで窓の枠が大きいので、部屋の中の様子は丸見えだ。四、五名の派手なジャケットを着た俳優らしい男や、ワンピースの女優らしい女達が、カット・グラスをあげて、大きな口をあけて笑い、なかの一組は、ここまで聞こえないレコードの音楽に合わせているらしく踊っている。

友忠は眼を伏せて手紙の続きを書いた。

「ブロードウェイというのは、ほんとうは、東京でいう浅草公園とか新宿歌舞伎町とかいう一かたまりになった娯楽街の町の名ではなく、このニューヨーク市を南北に……端は隣りの州のニューヨークからニューヨークのマンハッタンを通り抜けて海際まで……長く長く貫いて走っている通り筋の名前なのです。一丁目から百二十丁目を越す長い道筋のその途中には、支那町もあるし日本人町といわれるような町もある。冬には道端に凍死者が倒れているような貧しい町もある。劇場や映画館がかたまっている所謂ブロードウェイとは、そのほんの一部分の四十一丁目あたりから五十二丁目あたり、ブロードウェイから横に入った区画をいうのです。広いニューヨークから見れば、ほんの一握りの広さの町。そこを根城にして生きていく人になるのは並大抵のことではありません」

由起は東京に残してきた友忠の婚約者ともいうべき間柄の娘だ。友忠がまだ東京にいる頃、彼の属していた劇団ボブラ座に研究生として新しく加わってきたのが平沢由起だった。

その稽古の往き帰り。友忠は東中野の両親の家から通い、由起は落合の家から通った。帰り途が同じ方向だったことから親しくなり、或る冬の夜、別れ際に由起が友忠の手を握りしめて離さなかったのがきっかけで、二人は唇を交した。二人の仲はそれ以上ではなかったが、いつの頃から由起の家に遊びに行くようになった友忠に、由起の母親が

「由起を嫁に貰って下さるそうですね」

笑顔で言った。友忠さえその気なら二人の結婚を許してもよさそうな好意のある口のききかただった。

友忠には、由起と結婚するという、そこまでの気持は固まっていなかったが、由起の母親がそんなことを口にしたのは、多分、由起が母親にむかって、友忠が自分と結婚したがつている、という風に言ったからであろう。押しつけがましくもなく、よければ暖かく迎えたいと思っているらしい相手の好意が気に入って

「いま直ぐというわけにはいかないんですが、やがてはお嫁さんにいただきたいと思っています」

友忠は答えた。

「そうですか、こんな娘を貰って下さるなんて、有難うございます」
まるで、もう結婚してしまった娘婿と母親みたいな雰囲気就由起はてれくさげに笑って

「母さん、およしなさいよ、そんな話……」

母親の話によると、由起の父親は、彼女がまだ中学生で十四歳の時に死んだのであるが、生きている間、弁護士をしていた父が娘を甘やかし放題に育てたので、由起は気ままで強気な勝手放題の娘に育った。

「だから高校を出るなりボプラ座にはいったのも、大学を二年で中途退学したのも……あなたとおつきあいするようになったのもね」

母親は友忠の顔を見ながら笑って

「全部一切、何一つ私には相談なしなんです」

まるで……だから幸福なんですと言わんばかりの甘い母親ぶりだった。

母親は真剣に友忠との結婚のことを考えていたようだし、彼もその気でいたが、そのことはまだ友忠の父母には話を通じないままに、彼は由起を東京に残してニューヨークへきてしまった。日本人のアメリカ渡航はアメリカ市民権を持つ人からの招きの手続がない限り、観光客か短期滞在の商用渡航しか許されてはいない。友忠は彼自身に対してその手続をとってくれる人への返事を急がされたので、とにかくニューヨークに渡り、渡航の目的を達して、一度でもブロードウェイの舞台に出られたら、一旦帰国して由起と結婚し、彼女を連れて再渡航する気だった。

「だが……僕でさえ、こんなに苦勞をしているのに……きてはいけない……決して無理をしてきではない」

友忠は、さっきの手紙の続きを書いた。

「僕を見なさい。僕は渡航以来三年にもなるのに、まだ……」

此処まで書いてきたら友忠の眼から涙がこぼれた。頑張っても無理なことが判っているながら、この上頑張り通そうとする自分の愚かさが哀れて涙をこぼしたのである。

向い側の3¹/₂二〇ドルのアパートの窓の中では酒に酔ったらしい連中の合唱がはじまっていた。彼等の出演しているミュージカル・プレーの中の主題歌を歌っているのもあろうか。彼等は生活の中にも仕事を楽しむ。だが、友忠には、生活はあるが、仕事がない。あるのは仕事を得るための手段としての苦しい生活だけである。

翌日の朝、友忠がステージ・デリカテセンに出勤してゆくと、油臭い料理場で皿洗い仲間のト

ニオが言った。

「トモ……今日は忙しいぜ、ロジエーの芝居が舞台稽古だ。出前はお前の係りだからな」

トニオはイタリア人だ。その名前、正確にいうと、トニオ・サントノテイ……彼は皿洗いのかたわら料理人としての腕を磨き、やがてはこのブロードウェイの一角に店を買ってピッツァ専門の大衆料理店を開くのだ。と言うのだが、その決意の割にはコックの業を覚えようとする努力も見えないし、店から貰う給料も、休日のたびに近くの劇場の踊り子を追いまわして、いいところを見せようとして使い果たしてしまふ。近くの劇場の楽屋の俳優達から食事の出前の注文がきても、好きな踊り子のいる楽屋以外には腰を挙げようもしない。

「トモ……出前だよ。いってこいよ」

そのたびにトモこと友忠はコック帽をかぶり直して出前を運ぶ。友忠にとって、それは厭なことではない。頼まれた俳優の楽屋に食物を運び、料理の代金と一割五分のチップを貰うと、彼は舞台の袖へいって、進行中の舞台の芝居やミュージカルの歌をうっとり聞いてくる。料理場に帰ってくると、トニオが言う。

「舞台の横じゃあ、オーディションはやらねえんだぜ」

オーディションとは、一つの新しい公演の稽古が始まろうとする直前、プロデューサーや演出家はその作品の配役を決定するために多くの男女優やダンサー達を集めて、誰がどの役にふさわしい役者であるかを試験する、その催しのことを用いのである。役にふさわしいと認められ、契約を結んで貰った俳優だけが拾われてゆく。

日本では俳優と名がつくものの大部分が、大きな会社と専属契約を結び、その年間契約がある間は舞台に出ようが出まいが、一定のギャラを貰って生活の保証を受けているが、外国では俳優はいつでもフリーである。フリーであるということは、特定の会社の束縛を受けず、どの劇場に出てもいいということなのであるが、それは同時に、どの公演かに役がつかない限り、永遠に失業しているという意味でもある。

だから、どの劇場かに新しい公演の企画があり、そのためのオーディションがあると聞くと、おおげさに言えば、アメリカ中の役者が有名無名を問わず雲集してくる。プロデューサーや演出家の厳選の末、何人か何十人かの男女優がそこで拾い上げられ、他は次の機会を待って散ってゆく。すなわちオーディションとは、役者が雲の上にきらめく星を手に入れるための運をつかむか、失望のカードをつかむかの別れ途となる。いつでもきびしい網の目なのである。

トニオは友忠にむかって、そのことを言うのだ。

——舞台の横でボカンと口をあいて見てたって、誰もお前を認めてくれやしないぜ。怠け者のトニオだって、できるなら仲間のトモがスター役者になつてくれればいい。そうすればトモの仲間の女優達とだって遊べるかも知れないじゃないか。

その日は、トニオの言う通り忙しい日だった。友忠はステージ・デリカテセンの料理場のフライパンの音や油の灼ける音を後に聞きながら、幾度か劇場の楽屋に足を運んだ。その三度目の出前を済ませて帰ってきた時、客席と料理場の境目の扉をあけてボーイ頭のルドルフ・キースラーが、友忠を顎でしゃくって呼んだ。

「トモ……お前、ミセス・サワイを知ってるか」

「知っていますが、何か……」

ミセス沢井というのは、いまニューヨークの彫刻家の中では当り屋だと言われている河内五郎の内妻……とでもいうのか、まだ籍はいっていない妻である。元は日本の映画女優だったらしいというのが在留日本人達の風評だが、彼女がはじめてニューヨークへきた時は独りだった。それが一年もたたない内に河内五郎の妻となった。その良人の河内五郎それ自身が、ニューヨークにきてから五年たたない内に多くの外人芸術家を押しつけて、彫刻家としては大きな仕事をとり、個展をやっても、二日とたたない内に、その多くの作品が売約済みとなってしまうほどの人気者となった人物なので、古くからニューヨークにきている在留日本人の芸術家からの風当りは強かった。彼等は永い努力をつづけながら、しかも河内五郎ほどに商売がうまくないから貧乏のしつづけた。しかも成上り者河内五郎の妻沢井杏子はその連中から見れば氏素性もさだかではない女。ミセス沢井こと沢井杏子は良人の河内五郎と共に、よくこのステージ・デリカテセンにやってくる。この店にすればブロードウェイの劇場に出ている大抵の男優や女優の顔を見ることができると、その時、彼女等の知合いがいれば紹介もしてくれる。河内夫妻はこの店での紹介が縁となつて、しばしば俳優連中のパーティに呼ばれたり、彼等を招んだりしているらしい。だからこの店でも夫妻の顔が見えると、ボーイ頭は真っ先きに飛んでいって、御機嫌伺いを述べてその日のメニユーを見せる。

「知っているなら、その油くさい帽子を脱ぎ、ジャケットを着かえて店に出てこい……ミセス沢

井が呼んでいる」

「今日の働き時間から休暇をもらってもいいのですか」

「料理場のボスに話しといてやろう……いいお客様だからな」

トニオがなんだなんだときいたが、友忠は理由を言わずに服を着換えた。

友忠が店に出てゆくと沢井杏子は隅のテーブルに独りだった。

杏子は友忠の顔を見るなり言った。

「いままで此処にヘンリー・フォンダがいたのよ。あんた知らなかったの……彼が出ていくのと一緒に此処にいた客がみんなついて出てしまったわ」

「知りませんでしたね、僕は料理場の係だし、出前の料理を運ぶのに忙がしかったから……知っても此処まで出てくるわけには参りません。出てきたってお客様と一緒にサインをせがむわけにはいかないでしょう」

友忠は少しひがみっぽい顔をして笑った。

杏子はこんなレストランの片隅にたった一人坐っていても、大輪のバラのように華やかな女である。三星商事のニューヨーク支店長をしている男が沢井杏子を評して言ったそうである。

「あの河内五郎の女房だつていう女、ブリジット・バルドオに似てるというのが自慢らしいが、お脳の程度はどうなのかな」

それは、こんな美しい女をまたたく間に手に入れた河内五郎に対しての嫉妬の言葉ととれるし、ときどき常識外れな行動をとる杏子という女に対しての適切な批評ととれる。ニューヨーク

クに何年か住む在留日本人の男達から見ると、内地からひょっこりやってきた日本の独身女性は、できるなら、いつまでも彼等共同の友人でいなくてはならない。そのルールを逸脱する女は、大抵お腦が悪いか、浮気者かと言われることになる。

「友忠さん、あんた今日は閑なの……閑ならつきあつてほしいんだけど」

「と仰有ると」

「外出してもいいのですよ」

「外出……御一緒にですか」

「ええ……」

「奥様と呼んでいらっしゃるというので一応暇は貰ったのですが」

「じゃあ私と一緒にきて……」

在留日本人に、たとえばABCの級がある。A級とB級はつきあうことがあるが、AとCが外出を共にするということは殆んどない。あればAの庇護をうけて渡航してきたCの場合だけである。CはときどきAに連れだしてもらつて、骨離れしそうな飢えた身体に、高級レストランの栄養のある食事を注入してもらふ。

ところで杏子はたとえぼつと出の渡航者であろうとも、河内五郎の妻になった瞬間から日本人居留民の社交界ではA級の女性なのだ。それがこのレストランで、ただ顔見知りだというだけのC級の友忠を突如として誘つた。こんなところが、杏子のお腦の程度の低さと言われるのもあろうか。